

二次元ドリームノベルズ/PDF立ち読み版

メルティ マリア

復讐の魅戦士

小説 狩野 景

挿絵 高浜太郎

第一章

Sho
No
Mercy!!

第二章

Memories
Remain

第三章

Love
to
Hate

第四章

Precious
Things

登場人物紹介

Characters



きみしま きりか
君島 希理香

メルティマリアに変身し、兄の仇である悪の秘密結社グレヴディガーと戦う少女。非情な性格。

なかもり あやめ
中森 綾女

妖艶な美貌と肢体を持つ女科学者。グレヴディガーの裏切り者。

きみしま りょう
君島 涼

希理香の兄。

(こ、これを……口に……)

一瞬潜り込まただけで、未だに饅^すえた風味が口中に渦巻いている、太いミミズのような蔓竿。それを今度は自分から進んで口に含み、舐めしゃぶれと言うのだ。

「おや？ 兄貴の命がかかっているってのに、偽物のちんこじゃ不服ってか!! じゃあ、こっちの本物のほうをしゃぶってもらおうか！」

別にそのような理由で躊躇しているのではない。もちろんそんなことはわかっていながら、意地悪で言ったのだろう。スラッシュヘイマーは下衆な笑みを浮かべ股間をグンと前に突き出す。その途端、太い杭のようなものに希理香は背中をどやしつけられた。

「あぐっ!？」

つんのめり、両手を床につきながら顔だけを振り向かせる。

「ひっ——!!」

その目に信じ難いものが飛び込んできた。巨漢の股ぐらから急角度で反り返り屹立する、彼の本当のペニス。それは筋肉を勃起させた疑似男根が可愛らしく見えるほどの、桁外れなサイズを有していた。鯨銛のように猛々しく開いたカリ傘。幾本もの極太い青筋が浮き出たひとの腕ほどもある幹は、ゴツゴツとした瘤状の突起に覆われている。

唇のように開いた先端からは、興奮に先走る汁濁が溢れ、黒々とした竿肌を不気味に照り光らす。過剰に攻撃的な性器を目の当たりにして、嫌悪感よりも恐怖に打ち震える。

(こんなの……口になんか、入らない……)

無理矢理含めば顎が外れてしまいそうだった。まだ鼻面に突きつけられた偽勃起のほうがマシに思える。巨大陰茎から目を背けるように前に向き直ると、希理香は自分から身を乗り出し、軽く尻を持ち上げる四つん這いの姿勢となった。

「約束よ。お兄ちゃんを助けてあげてっ！」

震える声を気丈に張り上げ念を押すと、ぐねぐねと蠢く蔓竿の亀頭にかぶりつく。

「くっ……ふぁうっ……!!」

本物より小型とはいええ、それでも希理香の唇には太すぎた。口腔を極限まで押し広げ占拠する肉に噎せ返る。そのうえ、太竿にべつとりとこびりついた液濁が、味蕾を腐敗させんばかりの刺激的な酸味をもたらし脳を痺れさせた。それでも少女は意識をしつかりと保ち、亀頭の裏に走った筋へ舌先をちゅるりと這わす。途端に肉根がむくりと太さを増した。

「はむふっ！」

自分の舌が招いた生の牡反応に仰天し、希理香は思わず勃起を吐き出しそうになった。しかし生ゴムのような硬蔓は上顎を押し上げて反り返り、喉の奥へと潜り込んでくる。

「真面目そうなツラしてるくせに、いきなり裏筋舐めかよ。かなり遊んでるようだな、てめえの妹はっ!!」

意を決した希理香の舌遣いを気に入ったらしい。それをわざとらしく涼に報告する怪人

に、少女の顔が真っ赤に染まった。

(あう……違う。遊んでなんかない。杏子きょうじが言つてたみたいにしてみただけなのにつ！)

経験ある友達の入れ知恵であった。しかしそれを伝える口は、太い男肉に塞がれている。涙ぐんだ瞳で、訴えかけるように兄を見つめながら、希理香は奉仕を続けるしかなかった。舌を動かすにつれ先走り汁が唾液に溶け混ざり、強烈な生臭さとなつて口中に広がる。しかもぬるぬるした感触の液にはカリ首に付着していた恥垢が漂い、腐汁の濃度を高めていた。その液体をだらだらとこぼしながら、くわえた唇で太肉を上下にしごき立てる。

「んぐつ、んふうッ!! はふあ……」

奥までくわえ込んだ状態で口蓋で亀頭を圧迫しながら、青筋が走る筒肌を舌ペラで大胆にしゃぶる。上下に動かす口をカリ首の辺りまで抜きかけると、鈴口をクリクリと穿った。

「ぐつつつつはっ! もつと舌を動かせ。その程度じゃ全然イケねえぜっ!!」

気持ちよさそうな呻きを上げ、ビクビクと陰茎触手を震わせるのだが、射精する気配を見せず注文をつける。だが経験のない彼女では稚拙さをどうすることもできない。それ以前に、異性の性器を舐めるなどという恥ずかしい行為に、胸が張り裂けそうな辛さを味わっているのだ。

(怪物の汚い物……。違う、これは、そう……。お、お兄ちゃんのおちんちんよ!! そ、思うえば気持ち悪くなんか、ないっ!)

無理矢理にそう思い込むことで、少女は必死に耐えようとした。はだけたブラウスから覗き見える美乳をゆさゆさと上下に揺り動かしながら、激しく頭を振りたくり、口腔中で捏ね回すように亀頭をしゃぶり上げる。汚水が喉に流れ込むのにも構わず、ほっぺたを窄めて鈴口を吸い立てると、ばぶばぶぶつ!! と派手なバキューム音が響き渡った。

床に両手をつき身を乗り出してペニスをくわえ込む姿勢で、希理香の尻は軽く持ち上がっている。その桃果のようによく熟した肉房を、必死な口奉仕に応え、ぐねぐねと蠢く蔓陰莖が揉み捏ね始めた。

「あふんっ!!」

尾てい骨から背骨を駆け上る甘い波動に、少女が上擦った声を漏らす。怪物のおぞましさを紛らわすため、兄に尽くしているのだと思いついたことが、敏感部の感度を高めていた。背を弓なりに反らせながら尻を大きく跳ね上げる。ふわりと翻る青いチェック柄のスカート。その短い布地をめぐり上げて幾本もの濁棒が潜り込む。身じろぐだけでふるふる揺れる柔らかな尻肉が、亀頭に弄られて大きく窪みたわむ。

「——はっ、んぶああああうっ!」

脱力を伴う快感が染み広がり、もごもごと動かし続ける口から惱ましい吐息が迸る。

(お尻なんかいいじっちゃ……。おかしくなっちゃうっ!! あん……お兄ちゃん……)

気色悪い肉触手にまさぐられる現実を、妄想に浸ることでやり過ぎそうとする。しかし

涼のような上品さなど微塵も持たぬ長勃起は、無遠慮に尻の割れ目に潜り込んできた。体温で乾きかけていた桃色のシヨーツを分泌液で再び湿らせ、重なり合った柔肉を掻き分ける。そして鈍く先細った先端で、布越しではあるが奥に窄まった肛門を穿り始めた。

「ひっ！ ひあっ!？」

思いがけない箇所を襲う落ち着かない感触に、ピクンと身を強ばらせる。妄想へと逃避しかけていた意識を現実へと引き戻された。

「いやああっ！ きはないいつ!!」

落ち着かない官能に耐えかね、希理香は尻を浮かせながら逃れようと腰をくねらせる。そのため、口にくわえた逸物への奉仕が中断した。

「なんだ、もうおしまいか？ まだ俺様はイッてないぜ。ってことは、兄貴をぶっ殺しちまっっていいんだなっ!？」

腰を振りたくり悩ましい声をこぼす希理香の様を後ろから眺め、巨漢が興奮に高ぶる。

「はああっ！ いやっ!! らめえ——ッ!」

からかうように言うスラッシュヘイマーの脅しに、希理香は泣きそうに顔を歪めながらレロレロと亀肉を舐め転がす。そちらに意識を集中させると、意地悪な後ろの竿がアナルを圧迫する。皺を押し、下着ごと潜り込んでくる先端に、背筋から冷たい汗が滲み出た。

「ふあああ……おひりい……や、やめへえ……!!」



両脚が萎えたように力を失い、へたり込みそうになる。それを許さぬかのように、鼠蹊部をくすぐり潜り込んできた他の触手勃起が、なだらかに盛り上がった恥丘を撫でた。

「はあつ、んんッ！」

女性器へと連なる曲線部に生じた脱力に、鼻から抜けるような官能の声を漏らす。その先触れに驚いている間に、疑似男根は牝陰部を求めて股ぐらへと潜り込んでしまった。

「あぐうっ！ らめっ！！ そこらめえ……」

危険地帯へと迫りくる脅威に処女の本能が慌てる。その反応を嘲笑うように、怪人の自在竿はショーツのクロッチで二重に厚くなつた股部分をめくり上げた。

「ひんんっ！」

塗れ布が貼りつき密閉状態だった弱肌に外気が触れる。冷たさに身をすくませた刹那、いままでの刺激の所為で綻びかけた大陰唇を、肉小芥子こけしに押し開かれた。

「——！！ はわああふッッ！」

花卉を捲られたただけだというのに、腹の奥まで巨大な舌に舐め刮げられたような心地に包まれた。女体で最も敏感な部分の危機に反射的に股を閉じる。しかしショーツの股部はずれたまま元の位置に戻らず、狂い咲きした女陰をさらけ出していた。

色素の沈着が少ない花卉が、乱暴な牡竿に穿られ乱れ綻ぶ。その内側に湿り気を帯びてぬめり光る粘膜が紅に近い桃色に色づく。そして薄絹のように控えめな小陰唇をひらひら

と震わせている。その陰裂の上端には、包皮に包まれたままの陰核が迫り上がり、可愛い突起を覗かせていた。ふっくり盛り上がった恥丘へと濡れて貼りついた薄い陰毛に飾られる処女の恥裂。その鋭敏箇所を、のたうち蠢く疑似男根がぐちゅりと掘り返した。

「ひっ！」

おぞましきよりも恐怖が先にきた。素肌をまさぐられ乳房を弄ばれたことも、耐え難い苦痛である。しかし、まだ誰にも許したことの無い秘蓄を触れられる怖さは、それらとは根本的に違う強烈なものだった。

「ひゃあつ！ やめへえッ!!」

もしこのまま、膣を抉られてしまったら、大切なひとに捧げるはずの純潔が不気味な肉勃起に奪われてしまう。取り返しのつかない事態への不安にわななきながら、希理香は淫触手の刺激を拒もうとした。だが、いったん潜り込まれてしまえば、女の割秘部は、どこよりも快感を生み出してしまふ箇所なのだ。わずかに押し開かれただけで晒されてしまふ敏感な粘膜部を、危険な肉竿の先になににゅっ、と刮げられる。

「——ひゃんぐつ!? あ、ふああ、あああつ！」

目の前が真っ白に光り、すべての思考が停止した。反り返らせた背筋をふるふると震わせ、全身からねっとりとした汗を滲ませる。その甘酸っぱい体臭をまどわせながら切ない嬌声を上げる。女陰の快感をこらえようとしても、しつこく菊皺を穿る肉矢尻が脱力をも

たらし忍耐力を奪う。さらに、はだけたブラウスの胸元から釣鐘型にはみ出す乳房をうねうねと巻きつく触手に揉み揺さぶられ、痛いほど充血勃ちした乳首を鈴口でついばまれる。その刹那、得体の知れない脈動が、奥底から膨れ上がってきた。

「ひい……んっ!! らっ——ああうっ!」

なんだかわからない初めて味わう濃厚な感覚。それを受け入れたらなにかが変わってしまふような不安感に、希理香は必死で抑え込もうとした。

(く、ふう……なにか出……我慢、が……ふわあっ!!)

だが、こらえればこらえるほど、脈動は濃厚さを増して下腹を揺さぶる。たまらず気を抜いたときだった。胎内の牝器官がドクンと激しく脈打ち、熱い液を吐き出した。慌てて括約筋を引き締め止めようとす。しかし、その熱濁が通る狭い筒は、意志に逆らうように広がって粘りを含んだ濃液を、びじゅん、と淫靡な音色を伴って放出した。

「あ……う……らめ……っ!! ひあああああうっ!」

脈動が胎内を掻き回しながら脳天まで駆け上った。乱舞する快感に肉体を混乱させられ、希理香はビクッ、ビクン、と感電したような痙攣に身を震わせる。意識に膜がかかったように思考がまとまらない。全身をねっとりとした快感が包み込み、気怠い気分が支配する。決して激しくはない軽めのものだったが、希理香は絶頂に達してしまったのだ。

(ああ……なに……? 私、どうしたの!?)

股から溢れ腿を伝う自らの熱液に呆然とした。いまにも泣き出しそうに歪んだ顔の目元が艶めかしくとろけている。当然、フェラチオを続けられる状態ではないのだが、男根を模した筋肉触手を全身から勃起させる怪物は容赦しない。

「俺を満足させる気はねえのかあ？ てめえばかり気持ちよくなりやがってっ!!」

自分で女体を弄んでいるくせに、少女の怠慢を責め立てる。そして小陰唇を絡みつかせ陰前庭に密着した亀頭の先で、クリトリスの皮衣を剥き上げた。

「——!! ツアアッ!」

短い野太い獣のような悲鳴が、美貌の少女の喉から迸る。快感を得るためだけに存在する鋭敏な感覚器官。そのちっぽけな粒突起から、絶頂で緩んだ全神経を焼き切るような激感が弾けた。四つん這いの身体を伸び上げらせ、希理香は自分の口中に伸びる陰茎触手へと寄りかかった。

「はん……んう……」

正面で硬勃ちする太蔓を両手で握り締め、わななく身体を支える。下腹の奥で秘められた女の臓器が鼓動するのを感じた。それでも希理香は健気に小さな唇でいっぱい頬張った勃起を放さぬように、んぐんぐ、と喉を蠢かし奥へ導く。

(あ……ん……だめ……しなくっちゃ……!!)

そして兄の命を繋ぐフェラ奉仕が途切れぬように、大胆な舌遣いで亀頭裏を舐めくすぐ

る。その悲痛な姿に、兄のほうが先に耐えられなくなった。

「もういいつ、希理香ッ！ そんなことやめてくれっ!! 化け物め、殺せっ！ 僕を殺して、これ以上妹に指一本触れるなッ!!」

自分のために淫らな行為を強いられた妹をこれ以上見ていられないのだろう、優しげな顔を獣のように荒げ、涼は吠えるような叫びを上げた。そして杭で貫かれた両手からの出血が勢いを増すのにも構わず、はりつけ磔を解いて怪人に食いかかろうと身体を揺さぶる。

「ふぁうっ!! おにいひゃんっ!」

命を削るような兄の抵抗に肉竿をくわえた口で希理香が叫ぶ。傷ついた肉体をさらに自分から痛めつけてでも妹を救おうとする涼。その兄を心配する妹。だが重なり合うふたりの絶叫は、スラッシュヘイママーのサディスティックな喜びを極限にまで高ぶらせた。

「たまらねえ……!! イイ声で鳴きやがるぜ、この羊どもはよおっ!」

慌てて涼が口をつぐんだがもう遅かった。興奮の高まりを表すようにのたうつ勢いが増す触手を、巨漢は希理香の喉奥へと激しく突き込んだ。

「——ぎっ!! ぐふうっ! がはっ!!」

息が詰まる痛みと苦しさにたまらず咳き込む。それでも少女は、青筋を浮き立たせてますます硬くいきり勃った肉竿を、じゅぶじゅぶと泡立つほど舐め回す。

「おらあつ! しっかりしゃぶれええつ、小娘えっ!! でないと、兄貴に責任とってもら

うんだからなあっ！」

これまで彼女なりに一生懸命舌を使ってもまったく射精する気配を見せなかった疑似陰茎だが、これほど激しく刺激しても一向に達する様子がない。そのうえ、他の触手たちが邪魔をするように身体中の敏感部を弄ってくるのだ。硬く豆勃ちした乳首はもうすでに鈴口の中にすっぽりとはめ込まれた状態で甘噛みされ、熱を持ったむず痒さを生み出す。

「くう————ンッ！」

体温が上昇する快楽に息を止めても、切ない呻きが甲高く転がり出す。それでもぎゅつと脛を閉じて耐えながらかぼりと亀頭をくわえた口を上下に動かすと、その動きにつられるように、軽く後ろに突き出した尻がヒクヒクと跳ねる。

そのふくよかな双房の間にも淫蔓は潜り込んでいる。女陰同様、いまでは尻穴もショーツをめくられ、鳶色の小さい口をさらけ出していた。相変わらず執拗に弄り続ける亀頭で菊花の鬘を円を描くようになぞられ、落ち着かぬ気分を逆撫でされる。

「ああ、ん……もうっ!!」

「兄貴の命がかかっているのに、気持ちよくお楽しみか？ 随分と薄情な妹だなっ！」
自分で快感をもたらしているながら、スラッシュヘイマーはその所為でフェラに集中できない希理香をなじる。そして、秘唇を押し開き陰核粒をついばむ肉矢尻とは別に、新たな亀頭を膣口にあてがった。

「は……あ、らめ、動い……ヒヤッ！」

「なにいまさらしおらしいツラしてんだよ。すぐにみつともねえ声でよがるくせによっ!!」

その恥じらいを嘲笑うように、豊房を大きく震わせながら抽送が開始された。

（あう、胸、いやなのにい……）

希理香の想いとは裏腹に、重なり合った美球の狭間は男根を柔らかく包み込む。乳房ごと覆った極薄布が密着を高め、一層感度を強くする。総毛立つような気色悪さも我慢の限界を超えている。それなのに抉るようなストロークで、太肉に胸の谷間を往復されると、上下に弾みたわむ美肉から官能が生み出された。

「ん……ふあああは……」

乳谷を犯す剛直に倣って、少女の肌を薄く覆った膜布の下に何本ものペニスが入り込んできた。腰から背中にかけての大胆な切れ込みからも、腹部の菱形に開いた箇所からも、寄生虫が肌の下へと潜り込むように透明布を押し上げて侵入してくる。

「——！ あつ、ふおんな、らメつ、いっばいきはアあああつ!!」

成分のほとんどが溶け流れて伸縮性がほとんどなくなっているメルティマスーツ。一本、また一本と下に潜り込まれることにその薄膜は陰茎と希理香の肉体の密着度を高めてゆく。

（ああは……おちんちん……だめ、こん……な……）

反射的に希理香は唇で根本を強く締めながら、舌先で穿るように鈴口を吸い上げてしま



う。その濃フェラが、男の引き金を引いた。

「おわっ、で、出るぞっ！」

満足そうに声を上擦らせた男の腰がぶるると激しく痙攣する。その途端、口中を犯す肉槍の先端から熱い液弾が放たれた。

びびゃっ！　ぶじゅばぶばあっ！！

えげつない噴射音が口蓋を伝って頭に響く。喉の奥に噴きつけられる飛沫の勢いに息が詰まった。その苦しさに追い打ちをかけて、青臭い異臭が口いっぱい広がる。

「ぐぶうううっ！　いい、いひゃあっ！！」

舌に絡みつくしつこいとろみ感が背筋を総毛立たせる。苦みを伴った吐き気を催す味わいに、涙を滲ませ呻く希理香へと、さらなる責め苦が与えられた。フェラ男の射精に誘われたように、牝体を覆う幾本もの肉根が、一斉に膨張しながら脈打つ。そして――。

ばじゅびばぶぶうっ！！

どびゅっ！　ぼじゅぶっ！！　じゅばぶばべッ！

希理香は幾重にも重なる濁音を伴った精液の一斉射撃に晒された。くすんだ乳白色の濃液が太い筋を織りなして降り注ぎ、びちよべちよと肌を打つ。

「あ、いはあっ！　汚ひ……ふおんな、はうあっ！！」

気の強そうな美貌もしなやかな肉体も栗の花臭い迸りに埋め尽くされた。絹肌到大粒の

形をとどめたまま貼りつくおぞましい白濁のその粘度に、滲み出した甘汗と男たちの竿汁に薄められたスーツ液の粘りが補われる。不自然な姿勢で身体を支えていた男たちの手から解き放たれ、おびただしいぬめりの中に腰を落とす。母乳と混ざり合った精液で全身を薄汚れた紅白の斑模様に移られながら、希理香はぐったりと横たわっていった。

しかし男たちの肉欲がこれで収まったわけではなかった。汚液まみれで荒く息を吐きしどけなく脚を投げ出して横たわるメルティマリアを、血走った凶眼で睨めつけている。

(な、なに……? いやな感じ……)

全身に注がれる焼けつくような視線にぞわぞわと背筋がわななき、希理香は息そうに頭をもたげる。その瞳に、信じられない光景が映った。

萎えることを知らぬかのように隆々と屹立した極太の男根。その竿肌は真珠を仕込んだかのように荒々しい疣瘤いぼこぶがぼこぼこと隆起している。根本からカリ首までびっしりと覆い尽くしたその突起のひとつひとつが突然大きさを増し、矢尻のような肉厚の傘を開き始めた。

「ぐふう……こんなに勃ちちまったあつ!!」

立派な龟头を備えた太い剛直の幹から枝を生やしたみたいに、無数の小さなペニスをおぞませた陰莖。そのおぞましい形状に、朦朧とした意識を一気に目覚めさせられた。

(あ、あんな、もの……を!? いや……ッ!)

異形勃起を得意げに掲げてにじり寄る男たちから逃れようと、希理香は萎えた身体力を振り絞って起き上がろうとした。しかし肛門から漏らしたミルク状の液が混ざった粘液の、以前にも増した滑りに自由を奪われ四つん這いにすらなれない。

「いいはまだねえ、メルティマリアさん。もっと気持ちよくさせてあげますよお!!」

ナノマシーンに改造されているためだろうか、ぬめり液をものともせず歩み寄ると、男は無力感に苛まれる希理香の腰を抱え、軽々と抱き上げてしまった。

股間へと迫る肉太の存在に恐怖が湧き上がった。反射的に両脚をすくめ、牝穴を守ろうとする。だが、何個もの龟头を生やした勃起竿が狙っていたのは、そちらではなかった。むちゅ、と気色の悪い生温かさを伴って、たわわな尻房の谷間に咲いた、未だに母乳状の液体を垂れ流す菊花へと海綿体が押しつけられる。

「あぐっ！ だめ、そこおっ!!」

不安をもたらず感触に腰を引き、括約筋を締めようと慌てる。しかし白い濁液を溢れさせてつるんと潜り込んだ龟头の感触に、震える声が漏れ出す。ただでさえ強烈な排泄感をさらに刺激され、直腸が激しい蠕動を繰り返した。

「くっ……あはっ！ だっ、めえっ!! そんな、あふあっ！ はわわあああうううあっ!!」

幾本もの小勃起に嬖を大胆に捲り上げられ赤く染まった顔が悩ましく歪む。居心地の悪さを伴った悦感に息を詰まらせる中、剛直はそのまま抉るような抽送を開始した。

「やああっ!! お尻い、変なんっ!!」

巨勃起をくわえ込んでひしゃげた菊瓣から、ぶじゅぶじゅと淫らな濡音を奏で、希理香は豊潤に熟れた桃尻から白濁したしずくを垂らしていた。

「もう一秒も待てねえって様子だな」

狂おしく視線を漂わせ喘ぎ続ける最中、正面から声をかけられギョツとなる。後ろから回り込んだ男たちがいま尻を犯している物と同じグロテスクな男根をそそり立たせ、列をなして希理香に迫ってきていたのだ。

「くうっ!! それ以上近づくなあっ!!」

おぞましさ以外のなにも感じない。そんな汚らわしい物だというのに、挿入されたら一瞬にして虜になってしまいそうな不安が湧き上がる。

理性と肉欲がせめぎ合う中で、メルティマリアは必死に逃れようとした。しかし大胆に動いた途端、尻穴を貫く剛直に腸壁を中から振られてしまう。

「——は、んうう……!」

逆らおうとする意志が萎え、弱々しい声が漏れてしまった途端に、両脚を背後からの手に抱えられ大きく開かされてしまった。快感に対して余りにも脆弱となった己の肉体への失望が渦を巻く。だがその途端、無防備に開帳された牝秘所へと、弾力的な硬さを持った肉槍が押し当てられてしまい、奥がごぼりと煮え立った。

「ふあむあつ!! あああ、ふといいの埋まああつ!!」

弛みほつれた股花弁が掻き乱され鼻にかかった嬌声を漏らしてしまう。見たくないという気持ちは濃厚な喜悦に弾き飛ばされ、恥所へ潜り込む凶竿から目が離せない。

「自分のおま○ここにちんぽが入ってくの、そんなに見たいんだ。じゃあもつとじつくり見られるようにしてやるよ。ほら!」

粘りつくような視線に気づいた男に陰茎を挿入したままの尻を中心として、身体をぐるぐると半回転させられてしまった。

「——! はわあつ!?!」

激烈な捻れ感が肛門に生じたかと思うと、一瞬にして視界の天地が入れ替わる。その瞬間に体勢が変わったことで、陰唇を掻き混ぜていた亀頭が股間から離れてしまっていた。

(あうふつ、い、いやあ……抜けちゃあつ!)

たまらない疼きが膨れ上がった。瞳を媚びるように潤め、物欲しげに男を見つめてしまう。だが返されたのは嘲りの笑みであった。

乱暴な腕で、希理香は地面に降ろされてしまった。背中を床へと押しつけられた衝撃で息が詰まり小さく呻く。腰からくの字に折り曲げられ大きく開脚されたままの股間が、仰向けになった自分の目の前に迫る。希理香はいわゆるまんぐり返しの体位を取らされ、恥ずかしい女陰を強引に見せつけられてしまったのだ。

「ぐうううあああつ……!!」

その尻を前に押し出すように男にのしかかられ、窮屈な呻きが絞り出された。だらしく綻んだ肉厚唇の狭間で、充血した粘膜が朱色に染まっている。そのうえ端で、包皮を完全に脱ぎ放った陰核が絶えず脈打ち、子宮を挑発し続けていた。

溢れ返ったミルク液と溶けたスーツの粘液にまみれ、悩ましく揺らめく小陰唇。その内側で狭穴が突きつけられた逸物を受け入れようと、精一杯口を開いていた。

（私の、こんな……うそ、ああ……んくはっ!!）

だからだと汁を垂らす下の口に、太い物をはめ込まれることへの期待が、もうこれ以上抑えきれそうにない。その欲求を察したかのようにアナル同様、柔らかく弛緩した入り口に肉矢尻の先端がぬぼつ、とはまり込んできた。

「——！ あひい、はうああ——ッ!! んいいいいっ！」

不自然な体勢を強いられた身体を嬉しそうに振り、自分の顔面にぼとぼと母乳汁の入り交じった愛液を滴らせる。

肛門のときは脱力をもたらず違和感が混じっていた。だが排泄が目的の穴と違って、快感を受け入れるためにある柔筒は、少女の肉体を喜悦で満たしてしまった。

（ああ、ちりちり膣内擦れてるう……だめえ!!）

逆毛状の小陰茎で内側から掻き上げられる快感に、脳裏が閃光で満たされた。

「気持ちよくつてたまらないって表情だな。お望み通り身体中弄りまくつてやるぜ！」

頭上高く突き上げた脚をビクビクと痙攣させ、腕を伏せたように形よく盛り上がった胸をたわませ身をくねらせる。華奢な肉体を取り巻きながら伸ばされる無数の腕に、赤く色づいた白肌をまさぐられ、少女の嬌声が粘りを増した。

「ひあは、そんなたくさん……おかしくなっちゃは」

乳房を裾野から揉み上げられ疼くような喜びに浸る中、乳首を粗雑に転がされる痛気持ちよさに潤んだ意識を弾き飛ばされる。

「わふあうっ！ あ、あんっ!! るはあ——っ!!」

脇腹を指先でなぞり上げられ、くすぐったさに身を震わせると、その快感を煽るように膝裏から脹ら脛までを絞り上げるように揉み弄られ、ぴんと爪先が反り返った。

指による弄びだけではない。溢れ続ける先走り液にべとべととなった陰茎が、身体はもちろん、腕や脚にもぬちよぬちよとなすりつけられた。

「ひゃんっ！ あふあ——っ、熱いひのおっ!! どくどくしてるうっ！」

勃起した剛直の焦げつくような熱さと強ばった感触を肌へと刻み込まれ、狂おしい脳乱に見舞われる。希理香は自ら身体を男根に押しつけるように全身を振らせた。

(ぬああん、硬いのお！ あ、ああっ、もおおっ!!)



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>